

〈12歳児DMFT = 1〉時代の「こどもの健康手帳」

杉山精一 Seiichi SUGIYAMA (八千代市開業)

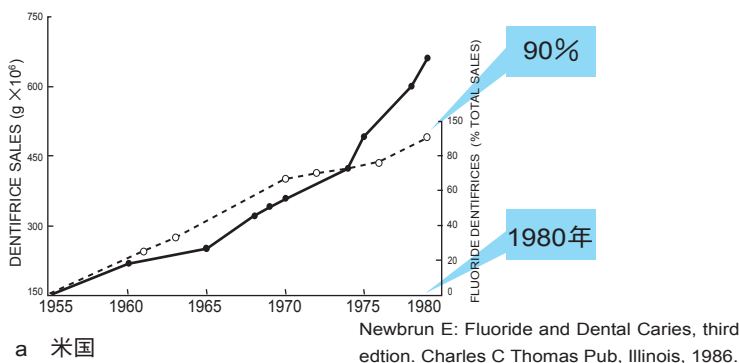
わが国の小児う蝕は軽症化し、う蝕経験歯数(DMF 歯数)は顕著に改善傾向を示しています。この背景には歯磨剤に占めるフッ化物配合歯磨剤の割合が増えたという事情があります。図1aと図1bは米国と日本のフッ化物配合歯磨剤の割合であるが、一見同じようなカーブを描いています。しかし、米国と日本では実に20数年の差があります。日本のこのグラフを出して、歯磨剤のシェアが増えたからいいではないか、と言う人がよくいますが、これだけ差がついた原因は何だったのでしょうか、この間にたくさんの子どもの歯をどれだけ削ることになってしまったのか、

という反省をしなければならないでしょう。これだけフッ化物配合歯磨剤が増えたのだからいいだろう、という考え方は専門家としての責任ある態度とはいえません。

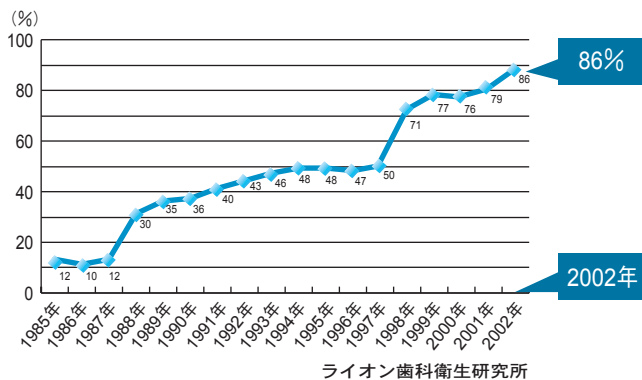
日本ヘルスケア歯科研究会で作成した歯磨剤のパフレット(図2)には、1歳で乳前歯が生えてきたら、ブクブクうがいができないお子さんには500ppmフッ化物配合歯磨剤を使おうと書きました。パッケージにはどれも濃度が記載されていないので、実際に買って調べてみました。ブクブクうがいができるようになったら、もう少し濃度の高いものを使いましょうというのが、私たちのガイドラインです。小児のフッ化物配合歯磨剤の使い方、その国際的な研究背景について田浦勝彦先生にまとめていただきます。

私の診療室で小学生の間、定期的に来院していながら充填になった子どもがいましたので、なぜ充填になってしまったかを振り返って調査したところ、う蝕ではなくて形成不全にかかわる充填が多いことが分かりました。そこで、改めて形成不全の重要性を再認識し、精査してみると、最初は上顎が萌出していなくて下顎が出ている。そのうち咬合するようになって歯質が崩壊していくという症例を写真で確認することができました(図3)。これを発見したときには愕然としました。新谷誠康先生に、エナメル質の形成障害について整理していただきます。

唾液の問題はなかなか奥が深く、非常に重要な問題です。唾液について今回は明海大学の渡部茂先生にお話をさせていただきます。さらに、小児の問題はう蝕ではありません。



a 米国

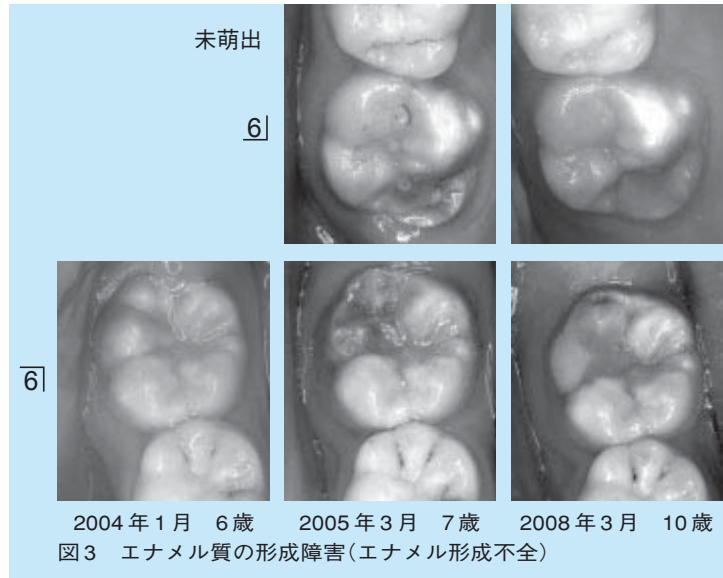


b 日本

図1 フッ化物歯磨剤の市場シェアの推移



図2 フッ化物応用の開始年齢についてのコンセンサスを確立しよう。



う蝕の軽症化に伴って、かみ合わせの健全な成長発育に注目が集まっています。そこで不正咬合の予防的ケアの問題について会員の井上裕子さんにお話をさせていただくことにしました。

ICDASに関しては、昨年(2008年)のヘルスケアミーティングでコード判定表の試作品を配布しました。会員の高木景子さんにその臨床応用について話していただきます。

ICDASは、新しい初期う蝕の肉眼所見を大切にしよう蝕の検査方法、診断方法なので、文章を読んだだけではなかなか理解しにくいのが実状でした。またDr. Pittsらが書いた本は非常によい本ですが、臨床写真があまり鮮明ではないので、研究会では非ICDASを推奨するというのであれば、導入の助けになるものが必要だということでコード判定表を作成しました。“コード2, 3, 4”のところはむずかしいので、複数の実例を示したフォトパネルを提案したわけです(図4)。エックス線は国際的な統一コードがないので、独自にXRという名前をつけて、見た目の診査とエックス線の診査をきちんと分けて、さらにリスクを評価し、それを経時的に評価していくことによって臨床医はどのような措置をするべきかを判断する、そのような新しい初期う蝕の診断方法を提案しています。

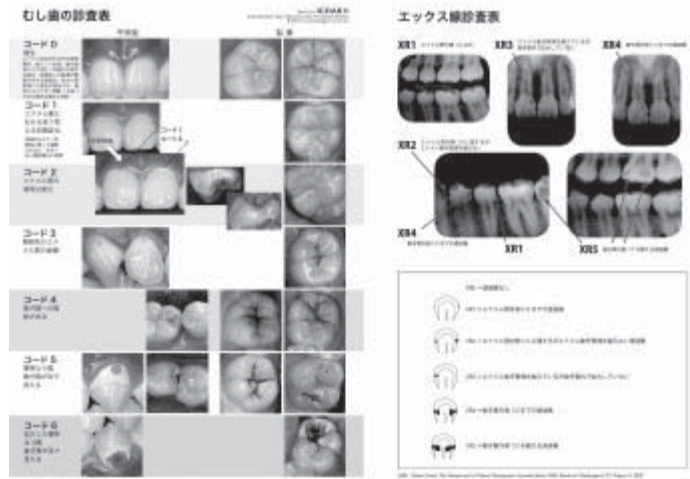


図4 医院でのICDAS利用とX線診査

これについては研究会会員全員にアンケート調査でICDASの認知度および開発したフォトパネルの評価について尋ねた結果を報告しています。同時にフォトパネルを購入し、ICDAS-IIの臨床導入に意欲をもって会員にその進捗状況と困難について尋ねる調査をしました(次号掲載)。

このたび完成に漕ぎ着けた「20歳までのお口の健康手帳」はこのようない連の仕事によって、しっかりした根拠のある、時代を先取りした健康手帳になりました。皆さんの診療所で是非活用してください(2011年6月頒布開始)。

「日本ヘルスケア歯科研究会誌」は、本号をもって終刊となり、「日本ヘルスケア歯科学会誌」に引き継がれます。学会誌は、原著を重視し、査読委員の査読を必要とするものですので、大きな飛躍が必要になります。新しい学会誌は、患者中心の医療を実現するため、修復・補綴に偏ることのない経過を重視した症例報告、メンテナンスケアの実績報告、臨床データから生まれる臨床疫学研究、QOL研究や患者のナラティブに着目した研究など他に例のない特徴をもつ学会誌となることが期待されます。困難な道ですが、振るってご投稿ください。